

# 鴻 koh

月刊俳句誌

平成31年4月1日発行  
(毎月1回1日発行)  
第14巻第4号 通巻154号

4 月号

2019



晴十日枯蘆を刈る舟の出て

林蔵の墓のほとりの霜くすべ

寒林にみて寒林の声を聞く

一山の芽吹きの鼓動の瀧の音

枝打ちの手斧の音の続けざま

梅二月漱ぐ水やはらかし

ざぶざぶと暮れて浦曲の午祭

春野ゆく十七音を疑はず

道真の宮の屋台に草の餅

からからと絵馬ほろほろと梅の白

湯島聖堂木の芽時雨となりみたり

心せよ寒九の水を硯海に

考へを止めよ菜の花月夜なり

# 心せよ

主宰作品

増成栗人

荒川心星

## 青い鳥

枯草の絮を飛ばしてゐる水辺  
枯菊のざわざわと日の暮れかねる  
落葉舞ふ舞ふ窓外に宵の来て  
枯葉降りまた一つ降り稿を擱く  
茶の花や母の一語の甦へる  
十二月病む妻の手のあたたかし  
妻癒えよ大つごもりの鐘の音  
青い鳥小鳥睦月の裏山に

梅東風やしづかに稚魚の渦解くる  
また伸びて鸞替を待つ人の列  
鸞替の整つてくる大きな輪  
寄り来たる老若男女鸞替へぬ  
そこそこの神籤を引きぬ初天神  
閑伽桶へ寒の水汲む薄日かな  
猫座る草やはらかく春立ちぬ  
みささぎに鳥声ひびく紅椿

## 梅東風

半谷洋子



# 羽音集

増成栗人 選



かつぶり水面の綺羅を壊しけり 船橋 藤原明美  
 あらたまの静かに伸びる水尾二つ  
 渚舞ふ鷗の群れの淑気かな  
 連風の海辺の空をひとりじめ  
 ほつこりと百合根あんかけ日脚伸ぶ  
 山に雪出しつばなしの三輪車 会津 中川幸恵  
 雪しんしん子らの寝息を聴いてをり  
 曇り硝子を伝ふ滴よ冬の夜  
 初詣またひとつ夢膨みて  
 コーヒーを両手で包む夜半の冬  
 閻魔堂ゆつくり巡る二日かな 横須賀 賀鈴木崇  
 禅林の古木は無言初詣  
 モノレール大きく傾ぎ雪催  
 鼻当てを曲げてマスクの定まりぬ  
 獅子舞のぬつと出てくる宵の路地  
 夕焼小焼微動だにせぬ冬木立 松戸 山岸明子  
 夜の道木枯だけが駆けめぐる  
 冬薔薇のきりりと杉田久女の忌  
 雪の朝ブローチのごと万年青の実  
 大寒の狭庭に柚子の実がひとつ

谷口摩耶



## 道の駅

一月の動物園に飲むココア  
 梟の眠さうな眼を向けられし  
 古本の文字の小さし寒明くる  
 春の雪手首に重きマグカップ  
 絵タイルを踏む駅頭の余寒かな  
 葉や子らの玩具に薄ぼこり  
 梅東風や大きな亀が動き出す  
 草餅をまづ籠に入れ道の駅

# 楽庵閑話

虫丸



先生  
友だちから  
もっと個性を出した句を  
作れといわれたんですが  
俳句における個性って  
どう考えたら  
よいのでしょうか



そうだね  
絵画など個性の  
わかりやすい分野も  
あれば  
能などの素人目には  
演者の力量の区別が  
つきにくい  
分野もあるが



どの分野でも  
個性は  
技術の  
裏付けがあつて  
はじめて生まれる  
ものだよ  
俳句も同じで、  
習熟の中からしか個性は  
育たないからね  
奇を衒つた言葉遣いを  
自分の言葉、や  
個性だと勘違い  
しないことだね  
ナルホドー!!



ダイエット  
みたいなものですね  
長〜く  
長〜く  
かかつて  
できるものですよね